

## 来たるべき対話に向けての二日間の対話

「第6回 親、教師、言語聴覚士のための吃音講習会

子どものレジリエンスを育てる—ともに育む 哲学的対話— 報告

2017年7月29、30日 於 大阪市・ホテルアウィーナ大阪  
坂本英樹（どもる子どもの親、教員、NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト）

### 講習会のテーマについて 桑田省吾さん（神戸市立本山南小学校）

今回の吃音講習会のテーマは「対話」である。教員は「ことばの教室」に通ってくる子どもとどう関わっていけばいいのか、親はどもり始めた子どもの疑問にどう向き合えばいいのか。そこに求められる関係性、態度こそが対話であると私たちは考える。

挨拶で実行委員長の桑田省吾さんは自身も言葉がスムーズに出てこない、うまく喋れない半生を過ごしていたことを語った。桑田さんが自らの吃音体験を言語化できるようになったのは小学校教員となり、吃音と向き合う子どもと出会ってからである。子どもたちと紡いでいく言葉によって、桑田さんは過去の自分とも向き合った。対話はいま目の前にいる相手との間になされると同時に、自己内対話として過去の自分とも行われるものだ。こうして桑田さんは吃音とともに豊かに生きる文化を子どもとその保護者、そして今回の講習会を企画、運営している仲間と模索している。

会場のホテルアウィーナ大阪は、伊藤伸二さんたちが「吃音ワークブック」や「どもる君へ いま伝えたいこと」の構想を練った場所であり、竹内敏晴さんが大阪でレッスンをする際の常宿であったところである。最高のホスピタリティを紹介する桑田さんの挨拶で熱い二日間が始まった。

### 吃音の実践バザール

#### ①「講習会のこれまでの歩みと今回のねらい」 高木浩明さん（宇都宮市立陽東小学校）

ことばの教室を長く担当している高木浩明さんはいまの講習会の前史にあたる吃音講習会（2001年～2004年）にも参加していた。吃音に関する玉石混合の情報が溢れて、選ぶ力が求められる現在と異なり、当時は情報が圧倒的に少なかった。担当者として必要な知識を求めての参加だったが、どもる当事者からの発言やどもる子どもの親と触れ、参加者同士であらゆる機会に話をしたことが、ことばの教室の教員としての自身の方向性を形成してくれたという。

哲学者の驚田清一は問題と課題との違いを、問題は解決することを目指し、課題は向き合うこと自体に意味があると整理する。ことばの教室が病院等ではなく学校教育の中に位置づけられているということは、吃音は治すべきものではなく「いかに生きるか」をテーマとして向き合う課題であることが示唆されている。

高木さんはこうした立場を明らかにして、通ってくる子どもと保護者と対面する。各人各様の吃音を生きている子どもは自身の専門家である。子どもには語る力があると信頼して、無知の姿勢のもと対等に向き合うところに教員としての高木さんの専門性がある。子どもと確認していく自身の助け方なり、吃音を通じた洞察は資源として共有、蓄積されていく知であり、新たなストーリーの揺り籠である。ナラティブやレジリエンス、対話というこの講習会の切り口は子どもの語りを整理するための方法論であり、これまでもずっと子どもと哲学的対話を実践してきたという第6回吃音講習会のプロローグであった。

#### ②「どもつながり（関西ネットワーク）」 谷口都さん（「あのねのひろば」世話人）、 鈴木真司さん、奥田紗穂さん（NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト）

桑田さんが吃音とともに豊かに生きる人たちが一杯暮らしていると位置づける関西には、大阪吃音教室と同じ思想の「ほっと神戸」やどもる子どもの親が立ち上げた親子参加型のグループがある。独

自の例会や集まり以外にレクレーションも実施し、それぞれのグループの人と人との緩やかなつながり、交流がある。そんな様子を知ることができる中西ユキさん（神戸市立神戸祇園小学校）作成の紹介映像に続いて、3人の登壇者を迎えた。

谷口都さんは二人のどもる子どもの母親である。病院や言語聴覚士の対応に納得できず右往左往していた谷口さんは吃音親子サマーキャンプやレクレーションでどもる成人と出会い、自分がいたずらに子どもの今と将来を心配していたことを実感した。親が思っているほど子どもは弱い存在ではない。こうしたロールモデルとなり、話し合える仲間とのつながりがあれば苦勞をすることはあっても大丈夫だろうと理解した。この気づきが谷口さんに地元でグループを作ることを促した。「あのねのひろば」という場である。

鈴木真司さんと奥田紗穂さんはこの「あのねのひろば」に参加している大阪吃音教室のメンバーである。若い二人は子どもたちと触れ合い、話し合うことで自身の経験や存在が何らかの資源として子どもやその親の役に立つのではという思いから参加を始めたというが、影響は相互交流的なものだ。どもりながら豊かにコミュニケーションをし、即興的に遊ぶ子どもたちの「どもっても大丈夫！」という態度に二人の人生は変化し始めた。

コンピュータ関連の会社員だった鈴木さんは児童支援員に転職し、若者支援の NPO で働く奥田さんは「あのねのひろば」での子どもとの関係性を職場でも活かしたいと模索する。後のものが先になり、先のが後になる。支えると支えられるとはメビウスの輪、人を支えることによって自分が支えられる。ネットワークとはそういう意味だ。

### ③「どもる人のための大阪吃音教室の実践」

#### 東野晃之さん（NPO 法人大阪スタタリングプロジェクト会長）

年 40 回の例会がある大阪吃音教室は東野晃之さんによれば、テーマに沿って、参加者の実体験をもとに話し合う語りの共同体であり、社会通念や思い込みにとらわれることなく、常に新しい知見や領域に向かっていく哲学的対話が実践されている場である。

テーマの一つであるウェンデル・ジョンソンの言語関係図は参加者各人のどもりの課題を把握するための格好の教材だ。吃音を立方体に見たてる。話しことばの特徴（X 軸）、その特徴に対する聞き手の反応（Y 軸）、本人の吃音に対する態度や受け止め方（Z 軸）の三軸からなる立法体の形、大きさの特徴をその人の吃音からくる悩みの質、課題と考え、過去の形や他の人と比較しながら話し合う。

従来、傍目からはどもるとわかりにくい人の場合、その X、Y 軸は小さく、Z 軸だけが大きい細長い、鉛筆のような立方体であると考えられてきた。しかし、これではどもり方の特徴と悩みの深さは比例しない、周囲にはどもりとわからない人ほど悩んでいることがあるという私たちの実感、経験が説明できない。

話し合いで出てきたのは表には出てこない心の中の「陰の Y 軸」があるとの発想だ。吃音を否定的に捉えるあまり、どもれば周囲からの信頼はなくなるに違いないと想像を膨らませる人にとって Y 軸の数値は高くなり、立方体の体積は大きく悩みは深いものとなると結論付けた。大阪吃音教室というセルフヘルプグループで実践されているこの洞察へと至る過程、営み自体が哲学的対話であると東野さんは語った。

### ④「竹内敏晴さんから学んだ日本語のレッスン」 伊藤伸二さん（日本吃音臨床研究会）

新薬によって耳が聞えるようになった竹内敏晴さんは自身の声と発声を激しく求める半生を送った。伊藤さんは治す・改善には関心はないが相手に届く豊かな言葉を切実に求めた。伊藤さんは吃音親子サマーキャンプで上演する芝居の演出や大阪の「竹内レッスン」で、最晩年の竹内さんと多くの時間をともにした。

「竹内レッスン」でからだはほぐれ、伸びやかに出る声の気持ちよさと、その声が人に働きかけることの驚きと喜びを身をもって体験した伊藤さんは吃音矯正と称する言語訓練のみじめさ、つまらな

さをよく知るがゆえに、日本語でどもる人のためのレッスンという形で、竹内さんから受け取ったものを今伝えようとしている。

示された日本語の発音の基本は「話すためには息を吐くこと」、「母音の流れと一音一拍を意識する」、「子音と母音を一緒に出す」というシンプルだが、言われて初めて気づくものである。レッスンの気持ちよさ、効果は当日声を出した参加者全員が実感できたことだろう。生活の中でこの原則を心がけるとしたら、子どもへの絵本の読み聞かせや一緒に音読をし、童謡、唱歌をたっぷりと歌うことだと伊藤さんは言う。その営みは子どもに素敵な贈り物、財産となるだろう。

## 基調提案①「〈哲学的対話〉で子どもに向き合う」 伊藤伸二さん（日本吃音臨床研究会）

### 伊藤伸二さんのレジリエンス

どもることへの劣等コンプレックスに陥り、苦しんだ学童期、思春期の伊藤伸二さんがそれでも生き延びてきた、そのレジリエンスは何なのか。第4回講習会の講師だった石隈利紀さん（当時・筑波大学副学長）との対談の場で発せられた問いかけを改めて振り返ることから基調講演は始まった。

伊藤さんが吃音に悩みだしたのは小学2年秋の学芸会がきっかけだ。どもりながら活発だった伊藤少年は台詞のある劇の役を外された。そこに台詞は流暢に話すべきだ、どもりながら台詞を言うのは恥ずかしいことだから、これは教育的配慮だという教員の意味づけ、吃音への否定的な眼差し、価値観を伊藤少年は感じた。この与えられた吃音否定の物語を受け取った伊藤さんは以降、活発だった頃とはかわって人との交流を避け続け、吃音否定の物語を強化、再生産する学校生活を送った。

この物語を転換することになったのが、どもったままでは将来はない、とても就職などできるはずもない、どもりが治らないと人生が始まらないと思いつめて、21歳の時に入所する民間吃音矯正所、東京正生学院での合宿の経験だ。

一ヶ月の間、学院の言語訓練を中心としたプログラムに一所懸命に取り組むものの誰一人として吃音が治ることはなかったが、自分以外のどもる人と出会い、生活をともにした日々を伊藤さんは毎日がお祭りだったと述懐する。自分一人がどもるという思いとその孤独から解放され、お互いの体験を交換し合い、そこに深い了解と発見、そしてユーモアと洞察が連日の対話を通して生成される場は祝祭空間としか表現できないものだろう。

社会人になることが想像できなかった伊藤さんは矯正所に通いはするものの、家庭や職をもっている人との出会いによって自身の思い込みを解放することができた。また、どもる状態に変化がないにもかかわらず、日々の語り合い、対話を通して吃音と人生に対する態度に変化の兆しが見られたことは、言語関係図や吃音氷山説の本質を掴んだというだけでなく、マイケル・ホワイトが「問題に対する人の関係が問題となる」というナラティブ・アプローチの哲学を先取りしているものだ。

伊藤さんが半世紀以上継続しているセルフヘルプグループ活動はこの洞察を実践、検証するものであり、多くの吃音とともに豊かに生きる人生と出会えたというエビデンスを示している。そこに一貫しているのは吃音の課題は各人各様であるがゆえに、自分が自分の専門家としてお互いに対等に向き合い、対話を重ねていく姿勢である。そこで生まれる語りがその人の人生を新たな語りへとひらき、更新、生成させていく場として大阪吃音教室は存在し続けている。

伊藤さんの寂しい学童期、思春期を支えた文学や映画に自身の境遇と思いを重ねる資質は物語る力として伊藤さんのレジリエンスとなっているのである。

### オープンダイアログへの視座

フィンランド発のオープンダイアログ（以下、OD）という精神病急性期の人へのアプローチがその領域を越えて注目されている。精神的危機にある本人、家族からの相談依頼に対して24時間以内の即時的な対応を基本に医師、看護師、心理士、家族や本人にとって大切な人たちがチームを組んで当人の自宅において「開かれた対話」を連日行うという実践である。この薬や強制的な入院に頼ら

ない方法が実は再発率も低いという、従来の精神科治療の枠組みを大きく揺さぶるあり方を伊藤さんは深い理解をもって肯定的に受け止める。

東京正生学院での祝祭空間と大阪吃音教室の活動、そして「べてるの家」の実践のあり方を知る伊藤さんにとって OD の哲学は自身のものであるからだ。精神病を関係の病と考えると、これからどうなるのかという恐怖と不安に駆られる本人、家族にその「不確実性への耐性」を求めるには「対話主義」を実践できる「社会ネットワークのポリフォニー」という OD の理論背景、関係性が不可欠だ。医師の権威は本人の不安をあまり、言葉を閉じ込めるだけだろう。対話の場面では自らの専門性を脇におけることこそが専門性であることを何らかの援助職にある人は知るべきだ。OD の場における対等な関係に基づく継続的なキーパーソンたちによるどう展開していくのか予想もできないのが対話だが、そのあいまいさを心のひだとして共有できるものから紡がれる多声的（ポリフォニー）な言葉が堂々巡りに陥るモノログの世界に支配される本人の言葉を促す。それはこの世に住む安心感と不確実な状況に耐える力を与える。

吃音もある意味で関係性の課題である。OD の 3 つの理論と大阪吃音教室、吃音親子サマーキャンプに流れる思想は同じだ。波現象のある吃音はその状態に関しては不確実性そのものである。また年齢によって課題も異なる、つまり今悩んでいないからといって、将来もそうであるとは限らないのだ。と考えるとこの不確実で見通しの立たない状況に耐える、持ちこたえる能力として作家・精神科医の帯木蓬生が提唱する「ネガティブ・ケイパビリティ」(negative capability) もどもる人に必要なレジリエンスなのである。

東京正生学院に行く 21 歳までの伊藤さんはネガティブ・ケイパビリティによって道を踏み外すことなく自身を支え、それ以降は物語る力と他者の物語を聴き取る能力によって人生を切り開いていった。そして、吃音親子サマーキャンプは 2 泊 3 日、対話と芝居を通して、自分の言葉に向き合い続け、それを語り合う力とサバイバルという状況を持ちこたえるネガティブ・ケイパビリティを養う、「未来語りのダイアログ」が実践される子どもによるセルフヘルプグループ活動と理解できる。

## ことばの教室の〈対話をキーワードにした実践〉

### ①「対話を振り返って」 渡邊美穂さん（千葉市立院内小学校）

#### 子どもと対話をする私について

ことばの教室の担当者となった頃、子どもからの「先生はどもらないよね」の一言が現在に至る渡邊美穂さんの教員としてのスタンスを決定付けた。この言葉を「どもらない私がどう子どもと向き合うことができるのか」と解釈し、「吃音親子サマーキャンプに行こう」と転換した。

当初は知識、情報を得て、子どもに伝える教員としての真摯な姿勢をもちながらも、子どもとの縦の関係をイメージさせる構造がそこにあっただろう。しかし、キャンプは誰もが参加者として存在する場、吃音を通して自身の課題を見つめる仕組みを持つ、「お客さん」でいることが不可能な空間である。

初めて会ったにもかかわらず話し合いをしている子どもの姿、子どもと話し合いのファシリテーターや劇のスタッフとして誠実に関わるどもる成人、さりげなく初参加の親を気遣い、声をかけ話を聞いている複数回参加している親の姿の場の力に渡邊さんはすっかり魅了され、存分に楽しんだ。この楽しかった思いと体験して感じ、考えたことを自分の言葉で夢中に語りかける姿にことばの教室の子どもたちは自分と対等に向き合う教員の姿を発見したに違いない。対話が成立する基盤が成立したのだ。

子どもの同行者として吃音の豊穡な世界に横並びで対峙する渡邊さんの姿勢は一貫している。子どもの中では確実に言葉が生まれ、紡ぎ出されている。でなければ、どもる男子の「ぼくのお嫁さんはわかってくれるはず」のようなカルタができるはずがない。

## ②「児童と保護者との面接」 瀬川幸子（横浜市立藤が丘小学校）

### 子どもとの始めの一步

ことばの教室に来るなりゲームを始める子どもがいる。遊びを通して、気持ちを解放しているのだとすればこれも一つの通級の姿である。しかし、本人なりになぜこの教室に通うのかは知っているはずだ。親とどんな話をしているのか、また、友だちにはなんと言ってお教室を出て行くのか。通ってくる子どもと吃音についての話の糸口を掴むところから、ことばの教室の担当者としての苦勞と喜びが始まるのだろう。

瀬川幸子さんは、「どもらない時が続いたり、どもる時が続いたりします。これをどもりのなみといます」などと吃音の基礎知識を台詞にした絵本や紙芝居をパワーポイントにして、子どもと一緒に見て話をする。何かに託して話をするのは、「あるある」になるのでハードルが低く、話を引き出しやすい方法だろう。ユニークなのは保護者にも同席してもらうこと。子どもの「あるある」は親にとっても、この子はこんなことを考えていたのかという「あるある」になる。家庭での親子の対話を促す取り組みにもなっている。

## ③「対話という繕い作業が生きやすさにつながる」 土井幸美さん（横浜市立幸ヶ谷小学校）

### 「対話の見える化」の試み

子どもと向き合い対話を始めるには教員も自らを語る用意が求められる。教員としての自己形成史を振り返ることはそのための資源として有効であることは、この講習会のメンバーの多くが伊藤さんや吃音親子サマーキャンプとの出会いを必ずといっていいほど語ることから理解できることだ。

土井幸美さんは、ろう学校の教員としてスタートした。きっかけは「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」と謳う「ろう文化宣言」（1995年）との出会いだ。医学モデルから決別し、ろうの世界のありようを独自のろう文化と表現し、それを生きるとの自己定義である。この哲学に触れていた土井さんが、きこえとことばの教室の担当となってから、「吃音を豊かに生きる」と主張する伊藤さんたちと出会うのは必然であった。

土井さんは通ってくる吃音や難聴の子どもと「自分研究所」を立ち上げ、「自分研究」のノート作りに取り組む。自分の課題に向き合う子どもの揺れや気になることやそれに対処する方法、考え方を書き込んでいく課題の「見える化」の試みである。それはナラティブ・アプローチという外在化であり、対話を始めていく資源としてのノート作りなのだ。

## ④「吃音について考え、表現する活動の取り組み」 溝上茂樹さん（鹿児島市立名山小学校）

### 「どもりキャラクター」の登場！

溝上茂樹さんは自身もどもる人だ。いじめられた体験はないが、何となく自信のない、将来への不安の強い少年だった。今にして思うことは悩んでいた頃の溝上さんはモノログの世界に生きていた。吃音親子サマーキャンプに参加して、ダイアログの世界で生きる必要を感じた溝上さんはそれをことばの教室での通級で形にしようとしている。

どもりカルタの変形ヴァージョンの自分の「どもりキャラクター」の絵を描く外在化の試みだ。色、形、表情を持った絵を前にして、それが自分のどこにいて、どんな働きをしているのかなどをエピソードとして話し合う。時期ごとのキャラクターの変化やその理由も語ることができる。Aさんは溝上さんに「とげ」というどもりキャラクターに苦勞をさせられたからやっつけたいが、意外にもその感情は50%だという。「思い出とかが残っているから半分は残したい」と語るAさんは自分史の中にどもりを組み込み、それなりの納得をもって生きている。ネガティブな思いも持つが、自分にとって大切な、自分の一部だということなのだろう。ともに生きる意味を教えられた思いがする。

通ってくる子どもみんなが一同に集まることは難しい。そこでホワイトボードにみんなに質問したいことなどを書いて、教室に来た人がそれにコメントをする、間接的なグループ活動をする。タイムラグを持ちながら少しずつコメントが増えていくスタイルだ。相互に関連したまたは相反したコメント

がボード一杯に広がる様は吃音の豊穡な世界を示す曼荼羅だ。子どもたちは時間を置いた間接的なボード上に外在化された対話にかえて他者の存在をリアルに感じるだろう。

#### ⑤「いま、ことばの教室でやっていること」 高木浩明さん（宇都宮市立陽東小学校）

##### 自分の様子をグラフにする

言語関係図や吃音冰山などの吃音の課題を可視化、外在化する実践に加えて、高木浩明さんは通う子どもの「クラスの中で話す量・話しやすさ・どもりがどれくらい気になるか」の3要素からなるグラフ作成に新たに取り組んでいる。

子どものある時点からの月ごとの3要素を折れ線グラフにする。このグラフの変化を子どもと一緒にいろいろなエピソードを掘り起こしながら話し合う、考えていく方法だ。ある子どもはどもる状態に関わらず、春になると吃音が気になる値が高まったことがグラフから見て取れた。それはクラス替えが近づいたことや、転校生が来ることによると理解できた。また、ある子どもは通級に来たことで気になる値が高まったことが明らかになる。それは同じどもる仲間と出会い、自身の課題に向き合い、気にかけることができるようになったからで、通級以前は実は気にしていないふりをしていただけだという洞察が生まれた。高木さんと子どもが共同作業で見出したユニークな結果である。

#### ⑥「国語科教育の限界と可能性」 原田大介さん（関西学院大学准教授）

##### 自己紹介から

原田大介さんはどもる成人として吃音親子サマーキャンプに2度、認知行動療法の太田裕さんを迎えた吃音ショートコースに参加している。ショートコースでの太田さんによる原田さんとの公開面接は「ストレスや苦手とつきあうための認知療法・認知行動療法—吃音とのつきあいを通して」（金子書房）で読むことができる。発達障害もある原田さんは授業という空間、構造になじみにくかった自らの学校生活を振り返り、いま大学で自身の著書名でもあるが「インクルーシブな国語科授業づくり」（明治図書）を研究している。

##### サマキャンはことばの教育だ！

この講習会のテーマである対話は国語教育的には「伝え合う力」と理解することができる。それを身につけるための話し言葉や書き言葉のバーバルな教育の重要性が強調されるが、保育や幼児教育の世界に触れることから教職に就いた原田さんは身振りや表情、声などの身体的なノンバーバルな表現もことば、言語なのであり、両者は連続しており、相互媒介的に補完しあうと指摘する。

原田さんは国語科教育における文学作品の読解を通して、その子どもの抱える生きづらさを表現し、他者と共有する授業空間を創造することをイメージしている。この論理をかりれば、どもりキャラクターやどもりカルタというノンバーバルな要素のある表現が、作品を作った子どもにそれを通した豊かな語りというバーバルな力と呼び起こす一方で、通級に来る他の子どもがその作品について自分の意見を述べることでそこにその本人自身の課題が反映されていく構造がことばの教室にはあるだろう。外在化されたものを通して自己を語ることは課題に向き合いやすい、語りを引き出しやすい方法である。

この仕掛けを最大限に活かしているのが吃音親子サマーキャンプだ。参加者同士の関係づくりから始まり、話し合いと作文というバーバルと芝居と登山というノンバーバルな表現が交換するキャンプはことばの教育のヒントに満ちていると原田さんは語った。

#### 基調提案②「ことばの教室の実践を基にした〈対話〉を巡る考察」

牧野泰美さん（国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員）

##### 吃音臨床の前提

ネガティブ・ケイパビリティという不確実であいまいな状況に耐える力の重要性が伊藤さんの基調

講演で提起されたが、現在も吃音はその原因、治療法とも明らかになっていない。吃音は本人、親、関わる人たちにとっては、この能力がレジリエンスとして求められる現象として理解できるだろう。ところが、ことばの教室の担当となったからには、ことばやスピーチについて何かしなければならないという考えにとらわれてしまう人がいるのも確かだ。そこに既に担当者の吃音への一定の意味づけ、価値観が入っていると牧野泰美さんは指摘する。

学習指導要領から 今回は学習指導要領を振り返ることから、牧野さんはことばの教室のあり方を整理した。「通級による指導は、・・・障害に基づく種々の困難の改善・克服を目的とする指導」であると規定されている。指導要領には吃音自体を改善すべきとは書かれてはいない。吃音の影響から学校生活に生じた何らかの苦労や苦手に取り組み、子どもの「自立活動」を促すのが通級なのである。担当者はそれぞれの子どもの工夫や吃音についての考え方を深めるための対話相手という同行者、同伴者という役割である。横浜の土井さんが立ち上げた自分研究所というスタンス、当事者研究の場がことばの教室である。

### 日々の研究所活動について

子どもが否定的な吃音観を持っているとすれば、それは子どもと親や友だち、教員、その他諸々の人たちやテレビなどの影響、関係の中で形成されたものである。その関係を作り直していく地道な研究活動がことばの教室である。学校教育はともすれば将来に必要な力を身につけることばかりに専心するが、将来身に付く力でいまを生きることができないはずがない。いまはいまの手持ちの力で生きるしかないのである。どもりが軽くなれば何々ができるを夢想するのではなく、どもりながら何々ができるを研究、実践していくこと。その関係性の中で子どもの力がついていくのである。

### 講義「レジリエンスから、哲学的対話を考える」 石隈利紀さん（東京成徳大学教授）

#### 子どもとの関わり—援助の前提となる哲学

2015年に続いて、2度目の講師である石隈利紀さんはことばの教室の実践発表を振り返って、原田大介さんならことばの教室では、「主体的・対話的で深い学び」であるアクティヴ・ラーニングが実践されていると位置づけるだろうと講義を始めた。

横浜の土井さんが関わった子どもの「つまらなくはない毎日を過ごしている」という言葉、鹿児島溝上さんの教室に通う子どもの自分にどもりがあることについては「いい思い出もあるかもしれないから、全部やっつけたらかわいそう」なので、やっつけたら 50%という発言は、二人がどもりを個人史の中に位置づけ、時にはうまく、時には苦労をしながらも何とかつきあっていること、当事者性をもって生きていることを証している。二人にとっての幸運はその真価を認め、素直に凄いとリスペクトしてくれることばの教室の担当者、小さな一歩をちゃんとフィードバックしてくれる同行者がいることだろう。

ここに子どものレジリエンスを発見し、育むヒントがある。子どもの当事者性なり、レジリエンスを育てるためには、ジェンダーバイアスや年齢に邪魔されない対等性を持ったサポーターとの価値葛藤を含んだアサーティブな対話が不可欠なのである。援助者の役割はこの位置に立つこと、それが援助者としての専門性なのである。時にはサポーター自身はその課題の当事者である場合も溝上さんの例のようにあることだが、しかしそれには条件がある。サポーターが自分の課題を整理できていることである。その課題があるだけで当事者性が担保されるわけではないのである。

ところが、現代社会は生命倫理学・現代哲学の森岡正博が「無痛文明」と名付ける、利便性を求め、苦痛や汚いと観念されるものを排除する高度な資本主義社会である。私たちは快適に生きることの代償に生きる手触りを失いつつある、当事者性を埋没させながら、消費者や観客として生きているのである。

べてるの家の「苦労を取り戻す」と宣言する当事者研究やことばの教室のあり方はこの思潮に棹差

す営みだろう。当事者と同行するものには問題を問題としているシステムを読み解く力が求められる。その専門性を学ぶレッスンとして論理療法は優れた技法である。

### 哲学的対話としての論理療法

論理療法はアルバート・エリスが創始した心理療法である。例えば、自己紹介でよくもったという出来事があって、その結果ひどく落ち込んだという経験があったとしよう。論理療法はこの事例をどもったから落ち込んだと理解するのではなく、出来事に対するその人の「人前でどもるのはみっともないことだ。評価が下がるに違いない」というような解釈枠組みが、ひどく落ち込むという結果を招いたと考える。出来事が問題なのではなく、その出来事をどう捉えるかが問題なのである。イソップの「すっぱいぶどう」の合理化するキツネや食べられなくて落ち込むキツネになるのではなく、「また食べられるさ」と違う餌を捜す柔軟なキツネになることが人生には大切だろう。選択肢をたくさんもつことが論理療法の肝である。

論理療法の第一人者でもある石隈さんは①「人間」と「行動」を分ける、②認知（考えること）と感情（感じること）を分ける、③適切な感情と不適切な感情を分ける、④ラショナル・ビリーフとイラショナル・ビリーフを分ける、の4つのポイントに絞って会場とエクササイズを実践した。具体的な内容は割愛するが、それは圧巻のやり取りだった。参加者のどんな意見にも即座に反応を返す様は、石隈さんが日頃からどれだけの選択肢を専門家として用意しているのか、鍛えているのかを知ることができるものだった。また、このやり取り自体が哲学的対話でもあった。

石隈さんは1998年にエリスが病身をおして来日した際の通訳を担当したが、そのワークショップに第3回の講習会講師の斎藤清二さん（現・立命館大学教授）が参加していたという。斎藤さんはいまナラティブ・メディスンという「物語と対話に基づく医療」という領域をひらき、ナラティブ・アプローチを医療の世界に導入している人である。出来事の捉え方を柔らかくしようというのが論理療法であるのに対して、ナラティブ・アプローチは一連の出来事、結果に基づく物語におさまりきらない新たなストーリーをユニークな結果として見出そうという方法である。両者は構造として近い位置にあるのではないだろうか。人と人、知と知の交流を喚起させるエピソードが嬉しかった。

### 子どもの同行者であり続けるために

対話によってレジリエンスは育つ。対話を続けるためには相手の言葉を翻訳、翻案したり、違った文脈に置き換えたりすることが求められる。こうした意識がユーモアの力をつけることを広い意味で援助職にある人は知ってほしい。まず、担当者自身が自分の言葉を持つこと、自己を語ること。それが相手との対話を促すことになる。そして、子どもの小さな一步を素直に感心、評価して、その力を言語化して返すこと。これをネットワークの力で支えること。石隈さんのレジユメの最後にある「自分が資源 みんなも資源」の意味するところである。

### 対談 石隈利紀さん&伊藤伸二さん

#### なぜ対話なのか

吃音の原因はわからず、治療法は確立されていない。不確実であいまいな現象に向き合うにはそれを経験している子どもに教えてもらいながら、一緒に手探りでその経験を表現できる言葉を探していく対話というスタイルしかないだろう。担当者は子どもの同行者、対等という立ち位置での経験の意味世界を探求する共同研究者なのである。伊藤さんはその子どもへの「好奇心・関心」をもつことの大切さを語るが、それはどんな研究者にとっても大切な資質であり、ナラティブ・アプローチでいうところの「無知の姿勢」に通じる態度である。

無知の姿勢とは相手がサバイバルしてきた人生に価値を見出し、その語り、ストーリーの正当性を認めるといふ敬意ある態度のことだ。千葉の渡邊さんの「子どものことが尊敬できる」の発言が想起



される。この姿勢は子どもを鼓舞し、自分にとって望ましいストーリーを選択していこうという主体性を育てること、そういう未来を準備することにつながっていく。担当者の専門性はこうした対話をより豊かにするための参照枠として、オープンダイアログや論理療法、ナラティブ・アプローチの考え方や方法に通じておくことだ。

### 世代性を生きて

二人の対談は今回で3度目だ。石隈さんはその都度、現在に至る伊藤さんの軌跡の起点となる東京正生学院での体験を聞いているが、石隈さんはそのストーリーが聞く度に変化していると指摘する。吃音治療に役立たなかったことを強調する語りから、合宿は役に立ったとの語りへと変化している。それに伴い語られるエピソード、登場する人物も変化している。伊藤さんが語る人生の事実は変わらないが、その語り方、意味づけは変化する。つまり、人生のストーリーが変化するのだ。

石隈さんは伊藤さんのレジリエンスは物語を語り、聴きとるだけでなく、自己内対話と他者との対話との往還運動を通して、物語をつくりかえていく力にあると語る。

さて、60代後半の石隈さんと70代前半の伊藤さんはエリクソンのライフサイクル論に従えば、高齢社会を考慮して人生の壮年期を終えた頃と理解できよう。壮年期の課題は先行世代からバトンを受け継ぎ、次の世代を育成する世代性にある。その任を十分に果たした二人は次のライフステージである老年期の課題である統合性への歩みに進む段階なのだが、その前にこれまでの中間まとめを提示する必要があるとふたりの話が展開した。

石隈さんはチームとして心理教育的援助サービスを学校教育の中で実践する、学校教育と心理学を統合した領域である学校心理学のパイオニアである。日本社会の教員は教えるだけでなくスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの役割も求められるのだが、石隈さんはその多忙な教員を援助するために、心理職として初の国家資格である「公認心理師」の制定に尽力してきた。それが形になったいま、1999年に出した「学校心理学」(誠信書房)の改訂に取り組みたいと抱負を語った。

伊藤さんは壮年期初期の32歳、1976年に「吃音者宣言」という中間発表、総括をした。その後はこの宣言の思想を生きるということ仲間とともに実践してきた半生である。そしていま、装いも新たに出発したこの講習会を重ねる中で「吃音とともに豊かに生きる」思想、実践を当事者研究やオープンダイアログの思潮と協同するかたちで、ナラティブ・アプローチやレジリエンス、論理療法を基に吃音臨床を再構築したいと宣言した。

【スタタリング・ナウ 2018. 5. 21 No.285】より